日本学術会議　国際対応分科会　自己点検報告書

国際対応分科会（小委員会）名　SCAR小委員会　　更新日　2012/6/29
（2009/05/01の形式）

国際学術団体に関する事項

国際学術団体名
（和文）　南極研究科学委員会
（欧文）　Scientific Committee on Antarctic Research
（略称）　SCAR

日本学術会議加入年（西暦）　1955　年

運営組織の名称・役員の構成等
運営組織の名称（欧文）　Executive Committee

	会長	会長代理/次期会長	副会長	事務局長
（氏名）	Mahlon Kennicutt	前会長C. Rapley	Sergio Marenssi他4名	Mike Sparrow
（国）	アメリカ合衆国	イギリス	アルゼンチン	イギリス

役員選出方法の概要（120文字程度で記載）

会長および副会長は、2年に一度のSCAR代表者会合で、立候補・推薦者のなかから投票で（各国１票）選出する。任期は４年であり、４名の副会長の任期は２年ずつずれている。

加入国・地域の数　31　ヶ国
主要加入国（10ヶ国程度を列挙）

アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、日本、チリ、アルゼンチン、ドイツ、イタリア、中国、韓国

国際学術団体のホームページURL　http://www.scar.org

国際学術団体の年間運営経費　US$ 430. 000
日本の分担予定額[事務局で記入]　1,458千円（2012年度）

国際学術団体の活動状況

総会・学術研究集会の開催状況（過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載）

開催年（西暦）	会議の名称	開催地	参加者数	日本からの参加者数	学術会議共催/協賛の有無
2010	第31回SCAR総会・科学コンフェレンス	ブエノスアイレス（アルゼンチン）	800	30	無
2008	第30回SCAR総会・科学コンフェレンス	サンクトペテルブルグ（ロシア）	1500	50	無
2006	第29回SCAR総会・科学コンフェレンス	ホバート（オーストラリア）	720	30	無
2004	第28回SCAR総会・科学コンフェレンス	ブレーメン（ドイツ）	900	30	無
2002	第27回SCAR総会	上海（中国）	300	15	無

運営に関する会議の開催状況（過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載）

開催年（西暦）	会議の名称	開催場所（機関等）	参加国数	日本からの代表者名	学術会議の代表派遣数
2011	SCAR役員会（EXCOM）	エジンバラ			
2010	第31回SCAR総会代表者会合	ブエノスアイレス・アルゼンチン	31	（2名参加）	1
2009	SCAR役員会（EXCOM）	プンタレナス・チリ			
2008	第30回SCAR総会代表者会合	モスクワ・ロシア（科学アカデミー）	35	（2名参加）	0
2007	SCAR役員会（EXCOM）	ワシントン・アメリカ			

出版物等（主要な定期刊行物・不定期刊行物を刊行頻度とともに箇条書きで記載）

SCAR ニュースレター（年４回）
SCAR Bulltein（年４回）
SCAR Reports（不定期）

活動状況(各項目につき過去5年間の状況を120文字以内で記載)

国際機関等の提唱で行った活動
国際極年（IPY）2007-2008をICSUとWMOの主唱によって共同実施、その中心的役割を果たした。
国際機関等への提言等
国際極年（IPY）2007-2008を実施するよう、ICSU,WMO宛提言した。 国際機関等、特に南極条約協議国会議に提言すべく、「南極における気候変動と生態系へ影響（ACCE: Antarctic Climate Change and Ecosystems）」なる文書を2009年11月に出版した。
国際事業等への参加・実施等
世界気候変動研究計画(WCRP)及び国際地球圏生物圏研究計画（IGBP）に参加、特に現在ではWCRP/CliC（雪氷圏と気候計画）を担っている。 国際極年（IPY）2007-2008を国際北極科学委員会（IASC）などと共に実施、その中心的役割を果たした。
全世界的/地域的研究課題への取組み
南極域における気候・環境変動の研究に取り組み、南極域の地球規模変動における役割解明にはげんでいる。特に、氷床下湖ボストーク湖の課題に積極的に関わっている。
発展途上国への対応
南極観測に関して発展途上にあるアジア諸国を支援する立場から、新たにマレーシアの正会員としての加盟を承認した。 シンポジウムへの若手参加者の旅費補助を行った。

関連学術分野の動向と今後の重要課題(120文字以内で記載)

地球温暖化のなかで、南極域がいかに反応するか、特に南極氷床が減少して世界の海面水位上昇に寄与するか否かが最大の関心事である。また、氷床下湖に100万年現在の大気環境から隔絶された、異なった遺伝情報をもつ生命体が存在するのではないかとの関心が寄せられている。内陸各基地における南極天文観測が活発化している。

国内における国際学術団体への対応状況

国際学術団体の役員就任状況（過去10年間・新しいものから遡って5件まで記載）

国際学術団体における役職名	氏名	任期	
		開始年	終了年
SSG-PS議長	山内　恭	2010	2011
副会長	島村英紀	2004	2005

学術会議の国際対応分科会（小委員会）名　SCAR小委員会

学術会議以外の国内対応組織・委員会等

文部科学省南極地域観測統合推進本部／本部総会
国立極地研究所／各種委員会

国内の関連学協会等の状況（主要なもの5件まで記載）

学協会の名称	会員数	学協会のホームページURL
日本地球惑星科学連合		http://www.jpgu.org/

学術会議の国際対応分科会(小委員会)の活動状況

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名	SCAR小委員会
所属分野別委員会	地球惑星科学委員会

分科会(小委員会)の構成

委員長	副委員長	幹事	
白石　和行	なし	伊村　智	

会員数	連携会員数	特任連携会員数
0	1	2

分科会(小委員会)の活動方針(箇条書きで120文字以内で記載)

・極地研究連絡委員会（旧南極特別委員会）の後を引き継ぎ、我が国の南極観測に関する共通の学術的重要事項を審議し情報を交換する
・国際組織である南極研究科学委員会（SCAR;ICSUの組織）代表者会合に我が国からの代表者を派遣するとともに、各常置委員会等に委員を派遣する

今期の会議開催状況(開催日時の新しいものから遡って６回まで記載)

会議開催日時 (2009/05/01の形式)	主な審議事項・議題等
2012/6/7	第22期第1回に当たり、委員長、幹事の選出を行った。また第32回SCAR総会への日本代表団員を指名した。第22期の活動方針について議論を行った。第21期で議論してきた「南極観測における定常・モニタリング観測に関する提言」を引き継ぐと共に、南極観測自体の継続の重要性を発信してゆくことを確認した。 SCAR予算が逼迫しており、2013年度より我が国の分担金を3,200ドル値上げする案が出ていることについて議論した。

日本における国際学術団体の活動の周知・広報の状況（箇条書きで120文字以内で記述）

既存媒体（極地研究所出版物、極地研究振興会「極地」、各種学協会誌等）を通じ、また電子メイル等で関係研究者グループに情報を伝達している。以前の極地研連の時には設置されていた、ホームページの再興を検討。

国際対応における国内学協会との連携状況（箇条書きで120文字以内で記述）

多くの分科会・小委員会とは違い、本小委員会は特定の学協会を背景とした組織ではないため、個別の学協会との強い連携はもたない。しかし、地球科学に関連する学協会の連合体である日本地球惑星科学連合とは密接に連携し、前期（20期）には共同で連合大会においてシンポジウムを開催した。今後も企画したい。

特記事項・国際委員会による指摘事項等への対応状況（箇条書きで120文字以内で記述）

分科会・小委員会活動の自己評価等（箇条書きで120文字以内で記述）

以前の極地研究連絡委員会と違い、現状では南極観測・研究に対応する本SCAR小委員会と、北極研究に対応するIASC小委員会に分離されており、密接な関係のある極域科学を共通の土俵で議論する体制が整っていない。今後、来期に向け、合同して極域科学の分科会を設置する方向を目指したい。